



1278  
29

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之四

東都 曲亭主人編輯



後輯第五十五

由井濱の奇貨  
執權邸の交易

朝夷三郎義秀あまのむらたけのよしひでの兄常盛つねもりと共侶ともりの宿所しゆくじよへかへんとするに、浦太郎うらたろうの  
川かみ留とどめられて且渠かつらの葛藤くわふとう二郎にじろうが異父いふの兄あにあるより、彼から有あ敷しきまりの置おきを  
とるりの領うりを、奈路なぢの常盛つねもりといふ、呼よぶめ某あの如くは、聊ちやう所じよあり  
家兄けあにを先まにや還かへせしめし、上うへ見けん矢やの趣と、亦また尊たうんの大人おとなに、報かへすべしを  
常盛つねもりありぬ、然しかに、和殿わだんの後者ごしやうの、舊ふるの終と、送おくり、あてて、大人おとなの、僕わらわ不ふ樂らく也なり  
ん、所ところ要えん果くわ為な甲夜かやの、間まに、こゝに、還かへり、て、義秀よしひで一ひと議ぎを、宣のたまふ  
はるまでも、さされ、某あが後者ごしやうと、皆みな送おくられ、ん、を、う、彼か賜たまひ、の、鑑かん権けんを、背せ

肩より為るれ一箇の奴隷との且くあるも苗び一其の年未民間小  
成長と身と浮萍のよも定めも獨行のしとけも後者の尋らへ  
事益る。その餘のれのみ悉くわくせふと推辞が常盛微笑然り  
とそも鳥夜るほま蕉火と兼るれるく道の程も便するん小兩二人を思  
へ。とよを義秀すめ否所要といも要時の程も首果収間退るん  
兩三人を要るといも常盛強ても苗め介らる隨意のひひ還り宿  
所はゆんぞと應之馳て一人の奴隷まらるるさう。あよ送る義秀は別  
とくくしとくく鳥の海面黎む黄昏時袂涼しぬ浦風は吹送る主従の  
家路をさして還りける義秀要時目送りく遙後方小退死居る浦太郎を  
呼近づけ汝何所の所要のりくこれを竊ひ引苗める彼藁二郎小異父の  
兄弟ありとのばざり一小舊里ありとぞ。この地に住るの故をわめ日ハを

其春ふのふことわん。とくくいばんといそを浦太郎声を潜めく縁田を知り  
刀口に疑ひの理り之僕この地は流浪く人の招塔とるりたる。一首を  
箇様々々々尾りとの。如此々々と継父苗四郎があらを汲く。弟は家を  
嗣せん為る。白養小下野る赤貝と逐電する。夏の趣介後小壺よほり求め  
ゆりる。浦平が塔養嗣とる。又浦平が仇る。鰐を捕へんと  
欲せ。故小身上いよく衰く。せんまのる。女房。校枝が叔母なれ。和田  
の奥は仕も守戸の局の。負より。且く。柱。と。それの。わ。く。の。  
薪炊の代は足る。ずも。あ。う。ご。ま。去。く。山。歳。の。春。女。房。と。武。藏。の。太。田。へ。遣。  
し。廣。綱。朝。臣。の。莊。院。へ。給。事。ま。あ。ら。せ。し。ふ。を。依。校。枝。と。り。し。は。又。  
し。ぬ。日。小。太。田。へ。の。ち。校。枝。と。訪。ひ。し。さ。よ。ひ。さ。く。矢。口。を。置。置。郎。小。  
呼。け。ら。れ。る。渡。船。の。為。体。ま。送。り。告。ぐ。さ。い。や。う。僕。の。年。末。弟。の。宿。

所と知らせざるに渠も亦兄とぞ誠心の篤かりの遭は故郷へ伴て家と  
 譲らんとてそのまゝの遺ぬとあはまむよりありと尋思を以て矢口にて  
 心もくたせをせざるに依り漕別れ宿所を還りて再なる継父苗四郎大人の  
 枉死の事又朝夷の好意あり寛家の軀を刺するも吉見冠者の恩  
 義を感し旧里へ立ちても鎌倉をも後ひゆらむ由縁ある事田殿の  
 太田莊へ赴き姫を仕するの締の顛末云云といぬ日校枝が物より  
 具小傳の事あり月勅の隠事も終つて校枝の嫂と知りし恨られせ  
 然るに其の誠心も還る不賣のれなる事多し田殿の鎌倉を閉籠れて  
 たりませ太田の莊の奴婢ども己が志皆離散して今同中隼人ぬと  
 校枝葉二郎ホのまゝに彼姫を仕するの事もわらむと噂さるるに  
 此のゆゑに彼地も亦たわりの心を校枝は昔葉二郎は對面して時宜はらば  
 これも亦且く彼如く足を駐めて妻と弟の次はさるるにこれ姫への心も  
 めてこの浦あて世渡り便著のまゝなる骨を惜て何せんゆとて軀を  
 その明の早ぬび太田へ赴き一宿りあつた次の日小彼莊院へもたせ  
 あらふふ宿所を焼亡れて人影もわらぬ宵のまはれ今ゆふ  
 のを感ひを解んとて近所里人許立より縁由を詔し地方のれ定ま  
 ありぬと鎌倉より討ちとく稲毛殿の詔は橋岡宮六と和郎が  
 野兵をわく竊まらぬ中隼人守直ぬと村長の宿所へ招きいと  
 むつろく崇られし宵莊院へ推せし矢庭は姫の主後を搦捕へ  
 ちこれ守直ぬが防戦ひ又彼校枝葉二郎が野の敵を搦攫し磔の  
 ごとく投退けを闕窺するのれありめて莊院は火をけける煙は紛れ  
 守直ぬを姫へ俱なり往方もあらむ落させぬのみ痛しき事

昔稟二男と桜枝の刀自ら戦没し七骸をまきごとく臥されが  
 紛れのるもゆらぎし或は事件の男女のこれより先は自殺せしその亡魂の  
 ゆるりて野の敵と御示がるといふれもゆきけれどづれが實説の虚言決定  
 らえよ誰うあふれそなされつものれ駿河前司の因徳とあゆらるれれを  
 その方ごゑの人々の姫との死かゝる戦没する亡骸を狗鳥の餌とせられた  
 況て彼名六は鎌倉殿の仰よりてうち向ふ方討まゆめは稲毛殿の私を  
 遣されるよりあふ主役より火傷して面目まやあひけ人妻ともすて夜  
 走中ゆらちや鎌倉へ還りしあ次の日里人商量して彼昔稟二男と桜枝の刀  
 自の亡骸を棺に斂めりるの曹源寺に葬り入りまじ石塔のまじりも傳稀  
 るかの忠死を誰とせ言ぬれもあふのれが事件の墓を名つけく忠義墳とも  
 りまはし心の人らひたり和主由縁の人らるる墳塋なりともそのためへ下

枚の水一枝の花より外まき死人の為まらる死のれいなる南を阿弥陀仏  
 は、緯詳は報られてはあふりける歎たし外使あふぬ袖の雨ふまきせん  
 宿もあふの里人は案内せられて件の寺に詣りあふとばかり妻弟が名を  
 のと返を墳塋に涙とあ向の水あてあふるるを縁返を悔の八千六百十  
 遍りて口説ても甲斐をあらたれも音あ鳴く鶯のあふる蛇のあふる衣朽るる  
 朽と共侶は死まきけと歎たを杖あふ死あふるるこれらひりる里人は謝  
 びと述別を告ぐはら寺と退け進まぬ杖もつごとくは悲し直るるから  
 秋も似たりうら雲の夢路とゆき心地くやうなぐ小壺あふりあふる妻  
 と弟が同ド日死せしといふれもあふるるこの浦人あふるる昔里るるあふるる  
 まりる計あり死とのと告て奈は龍とゆひひは細引の人数足らふを細引  
 理る駈出されて刺海に入られて鰻を捕ふ死圖とも引當れは鰻のあふる

腹せれんと朽をく覚期を究めりける折よく大人の詰末ゆひて上の見  
 糸入りあへば潜没の技をまめられく死を脱れりとのまらむを共獲るなり  
 ける兩隻の鯨を捕ふり陸引揚義時主の免させぬ仇を刺して  
 年来の宿望を遂さるゆひなる洪恩の鎌倉山より高小壺の海  
 上のと深き甚本一郎より僕より御庇より七父と外舅の冤邪の軀を  
 刺するも大なるぬ過世ある契とを思ひなれりま今より僕と甚本  
 二郎と思ひ召りつくるまでも使せぬこの身ひとつと弟と二人兼方思ふ  
 命を捨て仕んと願ふをうけつ小且田殿の魚をぬき落させ  
 めひより妻と弟が忠死のるも報知しなると不覚心のせられて  
 長物より小日とらうし御足を駐めなれりを礼をわたりぬひと辭せ  
 なく長たる人の誠は義秀の且感し且憐れく愀然とて嗟嘆し勝一  
 米高本一郎の義は仗と嫂と共侶の命を捨け欲健氣を吹かか如死の法違  
 夫婦も孝友忠義今世のヨヨくぬく死一糸の美譚彼弟ゆてこの兄  
 のりあの良人ゆり彼妻あり便りと求めり且田吉見両友は報知せん心  
 りとる死の且見姫のゆり。され間中守直もこのものもく潜ひ居る  
 され亦竊小往方とまて先仲支婦再會の方便も其処のわんり。る海と死  
 示をへたるも問へたるも言られ夜の濱邊に立在ていつまでも密談は死宿望  
 びりて意中も盡さぬはのれは跟く来よとのひら後方をるる假屋のさ選  
 される後者と招る。鎧櫃と背肩とをり去るを程は浦太郎推さぬ  
 今要時等の僕告及よまりりりく續松をりてあらん。のひら  
 遠く呼とめおたぬく島夜よりとて道路平坦るのありりる星光あて事足なり  
 誘とくといとて先よ真沙路は夜の夏る心地と風は吹れても程浦太

郎其死くける人由井の濱邊に彼経任時夏ホが首級許す梟られてその  
 罪惡を示さるる人々多く欲せしむる將軍の小壺の濱に假屋へ  
 出さるる人々多し其の関るはわらわらんとて思議するに  
 経任時夏ホが討れし四月十二日の日数を歴する  
 首級ともわらわら今炎皇の比るふ腐爛もせむとる人奇妙のりよゆり下  
 がるの風聞は件の首級はゆる月鎌倉より比みる梟らるる死のりよゆり執權の  
 大殿の時政の彼時夏は貞貞負ふべきことなるふ拒みぬひら斯きよ日と過され  
 しは秩父殿の理を推しとるもむく催促あひけれは今のちや大さるる腐爛も  
 爛もあつんとて今朝よりわらわら梟られしその首級はみる生る如くまじく  
 としてあるより執權の安宗は相違して呆れてとらまはまことゆりの例の人の  
 西に言あや梟らるる死時と大く差して今もあは世の人のよるる評判するふそと  
 潜め死告れば美我秀方へうち合味はく鍾を然るふより便路を遠くもの  
 らぬ向寄之誘濱傳ひよあてるととくあまの菅と歩の運びをわらわら  
 由井の濱邊に赴く程は宵のちや初更に迫りり當下義秀とて彼首  
 級どもの腐爛せざるに陸奥のちや時高利ホと相謀り浮槎道人の  
 授ける茶水を以て浸せし故の時政れを知れは既小許すの日を過し今に至て  
 梟らるる口の時夏は死後恥を掩ふとてそのころをわらわら深き腐爛する  
 その刃の恥をあらはしよるに腐爛を待た疑ひありあはれもなる首級の腐爛を  
 ぬぐ天の眞罪且茶水の経験の空のぬき知るふ足れは天のんむく民を合しめ  
 天言をて民はわらわらされしをれ時政が機密を撈り世の評判を肺肝を  
 視るが如しと怕る死のりよゆりと獨みつら仕裏に過ありとてひびく  
 只菅とて程は忽地後者をとらとて今逆後の首級とるると燈燭多しとい

不使之汝の鑑櫃と浦太郎は肩替りして近死町家へ赴きてさく蕉火を貫  
 ころく由井の濱邊で追著う。これにておぼと大刀の緒を燃事裏の斂る鉄を  
 そが俵とりと通与をまき浦太郎も進み寄る舌蕉火の僕が只走一走も永  
 めく来るん。せくとひらけて別れ去るとくけと義秀と急よ呼禁めてめくと  
 難くもあふぬれど。蕉火と微ゆるく別々あることわらば相識もなかり宿所へ  
 ひたり汝が更闌を尋ねるとた便るほ一柱くつふ意を任せより。これ有理  
 とあろをひら。躬て件の鑑櫃をち卸さう。背負揚れば供の奴隷もあろを  
 ぬて然ふ後より追著まう。徐よあるをめぐるとひら踵を旋うして市肆うて  
 走り去りけり。是より一義秀へ初のごく路をさく。ゆきとも前程の遠くねば  
 由井の濱邊よとめまよけり。現浦太郎がうら違ひを殺梟られる逆徒は首  
 級の経任時夏を首とと神井鬼六珍浦五十六路狗吼又糸糸子彈平太  
 鶴皮又鴉夜又ホ賊將とて七級あり。惜しむるも死夜の星光をの便ゆく。  
 せき定ふるも不足と。件の奴隷が蕉火とさりて来るやと待ひひさふ。あく  
 後方とるるの。且くともま在程は怪しむ。一箇の癖者梟首架は潜び  
 近づ建る柱よまどくけて攀登り。第二の首級と擡取擡る。ととるど  
 義秀乃ち透下を脇挿の刀を附合掃枝を抜とり。矢声をうけく。丁と  
 設ら。寃違の癖者の右の腕を打込めて忽地挫と墜れ。これも灸所を後  
 物ともせ。掻投捨く身を起こを義秀透さ。を衝ととま。捕塵へん。る  
 程は癖者も亦眼を。刀を果りと引抜く。戯む。あちち身を交ら。刀を  
 礮とら。落を勇士の働は目覚く。利腕を背へ振揚て。踏著々々動を。大  
 刀の緒解を。高も。小も。滅入を。縛め。浦太郎は牽ま。さ。近  
 立て透し。汝の原は何のけ。ま。賊徒の首級。ま。七。竊去んと。ま。ま。



いんげん - 豆 - 子

いんげん - 豆 - 子

月夜ノ捕



車馬ノ捕



七

おりや、汝の経任が残黨ありとて、人々頼れるるん。明々地々首伏せよ。時  
 宜まよとく命を助んとくいのをよ。と責問へ癖者怯るる氣色もや。あまのりた  
 穿鑿金三昧勿論和主が猜せざらむ。これ豈賊の残黨あるんや。主君の密意を  
 稟てあるふ名告るる晴を眩しもせん。然るに漫々索るるに後悔せよと罵る  
 まを義秀呵々とちち笑ひく。とらあひら。主の名も汝の名氏も云々と有はる  
 依よろちあせいのむ息の根留んむと罵りまう蹴倒して隻足の厭美を蹂躪れ  
 癖者苦痛堪むとて。や。等々名告るべ。これ執權の所内。主君  
 二代の近習の侍湯嶋佛太郎基連といふのれ。今宵時夏的首級を隠  
 せとある大殿の密意まよとく。猝のあま及ぶるの。好も歹も執權は後ふの  
 必采へ恃へ亡びざるのれ。和主も其処まあろあぶ。この縛とく解ねるる  
 これも主君は告む。後日お出宗あるとて。や。喃々と威ら懸し。口説く哉  
 義秀のあむ再声とぬのま。推察違ふとて。執權の家諫多と  
 せむいよ。免一が。世の人の時政親子を虎狼の如く怕れせん。これ彼外  
 求るとる。利のまを勢ひ。附人と欲する。あま。時政を怕る。死せよ  
 汝を彼家也。機密預るのれ。よ。七海び問ふ。是の。是れ。田藏  
 人々冤屈の罪小陥れる。謀の誰が所行ぞ。時政の伎倆も。必義時  
 奸計ある。此も隠を實を告よ。い。背骨を踏折る。い。あやうと責  
 問。母も足も膝も力も踏入れ。佛太郎。西三度知る。と。程は漸々小  
 千曳の石を厭ま打る。似く。息絶々。霜枯野邊。鳴虫よ  
 する。細かなる。声立て。要時實へ。や。主の為。命は換る。の  
 り。彼も田藏を陥れる。謀は大殿も。郎君の計略也。某密謀を  
 奉り。是れ。病疴も假托。湯治の暇を請ま。竊も奥へ走る。

軍の勝負士率の進退光仲ぬの執行する夏之趣送もあるとて  
見ぬく彼凱陣先走りつと云云と具に郎君は報いん更  
又稲毛殿親子と閑談しひく尼御臺と敬篤し又光仲の長唐櫃と  
相似る長唐櫃と四棹造りく驟雨の途中にあり云云と計やく罪を  
負しるその折供物の假宰領の面目を某の好も主命を己  
とをばさるるも大殿の郎君も光仲ぬを憎むと云これ一朝の事  
鎌倉中も下野中も彼人へさすは故主のさす背たる宗をいせ  
いたるい果の抑和夫何人ぞも主君も憚るも猛者も量のある  
りたるも謙倉武士のいものうとて起りくめひと呷言るくも勸解  
ると義秀時でいあわん汝類も名を同く主は告んと思ふと今名告  
むとも後あは知れん既首伏あるとてこれ決して汝を殺さ然と今  
かす乗物とりて送らん夏時暑さと思ひの随ひひ懸つ  
浦太郎とるるく鎧櫃は所要ありそのかん鎧を引出し七櫃のさす  
あへりてさすくといをさして踏まをさける沸太郎が項髪をさす  
宙に吊りく件の櫃へ推縮め振込く蓋りと壓さく舊の如く鎖かけ  
打敲をの沸太郎命惜くさ出をさす声をも立を扱も仇骨折し  
先休んと鎧櫃は尻うちらる大勇大度浦太郎の直と呆れて彼後  
者かつりあると今く待りける浩処は供の奴隸の梢蕉火を賈さ  
振照らるる本よければ義秀ややと呼び近づけ且浦太郎云云と差  
示しあろはとて嚮ふ沸太郎が滾し落せし時夏が首級を取揚よと  
をの如く梟さすつと掃枝を拾ひ取りと鮮血を拭き遠く鞆納め  
奴隸よさすこれの猛も要夏を末て時政ぬへ赴くははのかん鎧との

権乃之りて云云と殿原は皆えわけよ櫃の聊所要ありと浦太郎は願て久  
 らんさばれど蕉火をみる持せんいと多かり半日ちりてとむれたとこの奴隷を  
 あろぬ果て五六束身蕉火を分ちく浦太郎は遞与く鎧を肩よりち  
 ちりく隻身は照らすも蕉火の夜行の花の西東別れて家路は還りける  
 程は義秀方の櫃と浦太郎は背負く若宮巷路へ急ぐ程よその宵二更の  
 左側は執權第はあまければ前門をうち敲る用くと遅くと衝と入りく  
 玄関よりち登り執達人よりち對ひく名簿をとと出く杖のみ中り甚々  
 和甲の三男將軍家より徴れ朝夷三郎義秀へ今朝参著る程もく  
 こつみみりや召さるひく上の見参入りなりぬこの執比もまうまづく且  
 小壺の脚假屋へ召さるひく上の見参入りなりぬこの執比もまうまづく且  
 執權小拜謁して認られん為よ夜を犯し推参せりこのよう侍へひと  
 いへその人あるとして口杖の趣承りぬ帳面は記し置て後刻主人はまうし  
 せん夜々のい未儀は疲勞するといせも果て義秀の眼と睡り声ありて  
 この執比ける執達人の帳面は記されて置告さすてもよめるる甲夜過  
 ぐる小壺の召さる今執權は對面を請ひつ私に故るは是執權のあかて  
 國家の大事は係れる議ありそを多聞はゆまると云々と挨拶するる鳥辭  
 とやらんを礼とやらん和郎が今とをいさるる余の執達人とぞ半は執  
 權對面のあるまゝの還るればと敷圍く疾視噓り一面魂を奪ふのむされ  
 執達人の阿容々々と後堂は赴く義秀方のいれも時政は報へる時政は  
 眉根を擡めその朝夷との奴の侍稀る強者とと隣りては違へりけり  
 渠今大吏と告んといは對面せよといふ強んといはせよといはては驚く文  
 裳と敷る客房は坐をと占て呼入れて對面を當下義秀の進み入るとし且  
 入るる時政は後方より大刀持の童扈役より左右の両箇の辺習ひる直進へ

せん夜々のい未儀は疲勞するといせも果て義秀の眼と睡り声ありて  
 この執比ける執達人の帳面は記されて置告さすてもよめるる甲夜過  
 ぐる小壺の召さる今執權は對面を請ひつ私に故るは是執權のあかて  
 國家の大事は係れる議ありそを多聞はゆまると云々と挨拶するる鳥辭  
 とやらんを礼とやらん和郎が今とをいさるる余の執達人とぞ半は執  
 權對面のあるまゝの還るればと敷圍く疾視噓り一面魂を奪ふのむされ  
 執達人の阿容々々と後堂は赴く義秀方のいれも時政は報へる時政は  
 眉根を擡めその朝夷との奴の侍稀る強者とと隣りては違へりけり  
 渠今大吏と告んといは對面せよといふ強んといはせよといはては驚く文  
 裳と敷る客房は坐をと占て呼入れて對面を當下義秀の進み入るとし且  
 入るる時政は後方より大刀持の童扈役より左右の両箇の辺習ひる直進へ

菊燈臺の白昼の如く明るる小関とちちなる廊下の意は紋紗の燈籠を掛られり。既中て席は著くと死執達の家諫が先は進とて是れ是れ朝夷三郎ゆゆと調を執りて此下退死務彼方へと請進。臆る乳色さく時政さうら對ひて只揖と再拜せられ時政面色勃然と眼を仄信とんぐれ邊の和田の蔭子さうら。彼朝夷三郎歎今縁會を奉浴勝る衣冠賢才都會の府より礼儀疎弛田舎児の萬事さうらとせぬぬのの又。夜々の來訪何なるかと問はて義秀天うち抑はて歎息し見々谷も忽地声を房しく某嘗てはさうら唐山の周公且周成王の叔谷しく當時補佐の大臣より。老翁も生平の舖と吐て客を迎へ髪を束白く士よこれとも猶天下の良能賢才の致しる怨を憾とせり。越は和漢の今昔とあふまゝ老も亦將軍家の外祖より迺補佐の大任まわり周公且ゆり及びともあふと士とるる如くみづら莫大ゆと客を驕り君の爲の意あふ天下の賢人名士と徹るのあらざるや。のの如くあふ海内の賢才良智の袖を拂て他郷はまり亦只阿黨の小人の嫌倉中へ充滿あつべし。其の義をぞのりて老は媚を諛りも今寝門さうら驚しく聊めん為と述んと欲を左右の人と遠さけのといや。時政苦笑しくそののりてさうら此の漢學せし社儀の彼國の故事と引き老翁人を遣込賢自こそとられとらんとていられ然和漢の風俗異なりて又今昔の差あつれ周公の聖人なるべし。亦伯夷叔齊の大賢人の似るべし。唐の例を引くもの。さうらとてこれのものと密議ゆふゆとせんや。左右の人ののりとも會腹の。さうら一白ゆけしゆゆとせんや。義秀は元尔とさうら大當座の許容本意は稱り然る人々を煩さん其の役者も齋する。禮儀ゆり。

わくまのうのひとといふ一箇の家謀が遠く外面まのり且く  
二名よ件の概と社と廊下よりとあるを義秀側へ居措くと又時改まら  
對ひ某君父の愛顧まよる。ゆへに鎌倉の水を飲ま又鎌倉の飯を喰ふ。  
お軍家を見参する幸ひはぬれども年来恨人多しければ今執權を達  
する苞首の絶てる一のみ宵由井の濱邊之圖をもち入りて  
未曾有の禮の先この禮の奇特とら。トこれを穿ふの心奸隱  
隠とるく逆後時夏が首級と竊と。隠さんと欲する奇特のゆへに  
これを領ふとたの腹心の家謀とりく假唐櫃と造らんと賊徒退治の大功  
ゆ。光仲と寛屈の罪は陷る機関の況と吉見冠者主後佐味室内  
高利をいふ幸ひのをもる機関の皆この禮とゆりける玉通の隨意操る故  
る。されば又二つこれを撰ふとたの稲毛が腹心の家謀と太田の莊へ遣りて執

權の密意を偈へ且見姫を逼迫して辱めんとする機関のゆればこの禮を  
の父子罷り易く鳥と成るともつナリとす。

父も學問に造るるは、世に名を立せしむるは、

懺の由、其の画餅と云ふは、悪名も亦隨て後々まで傳へられん其の

譏と云ふより、嚮は夫老の爲とのひひ、即老婆親切を交易されり各々利

ゆり送の損のなれ物と云ふより、尋思あるひのと辨せしむ、同結を時改の

心あるより、又死眼と云ふは、肚裏もあやう、畏れも重忠能、負ふは逆後の首

級と鼻と云ふは、類り不諱ひ諫しむる経任、ホのまれば、時夏は當初の

と執立る副将ありしと、その首級さよ、来られぬ、いふより、恥るべしと

思ひければ、拒むるのふち、日と延せしむるも、重忠と云ふは、執念深

論じて己が、義秀も亦参著の、言えぬが、措れど、彼首級共と今

朝を、由井の濱へ、鼻と云ふは、素より、あつた、亭午の比より、將

軍の、小壺の濱へ、鼻と云ふは、衆人、憚り、首級と云ふは、其れ、

べし、衆人の、彼時、夏が首級と云ふは、取隠し、せん、と云ふは、

湯嶋、佛太郎と、彼知、遣し、うける、折の、うけて、義秀、奴は、撞見、と云ふは、生

拘りて日々計りて夏まは送るも亦さしと鄙詰よひ百日の詔は  
 放屁ひとらせ放消しと異るる況況先伸を隔れる謀り義時が親を  
 知るせむ計謀せむ緋士二分まるりたる沸太郎が如此々々と下されは  
 其たる尤秘密の妙策るれば緋毛と沸太郎が外よるる見のるる  
 この目をも義秀が奴うち詮せしを斬断され亦只これらの怪勉の事と早  
 餘今日置腐しる彼首級共此も夢の儘ありけりも亦是不思  
 謀といひつて緋の事よ齟齬へ今義秀が望ま任と先沸太郎を受取て  
 介後よ又せん御あつんこれらのよりとつ妻があつん子孫も高長せり  
 る得よれ智計の失れれども翌まて俟るるありは只穩便は多しはれり  
 とい尋思と眼をひらて義秀より對ひ目今われ一越とて聊愚  
 案と旋くまは甲曹の武士の緊要のらんや奇特ありの事を異るるこれら  
 贈るとるへ交易と望ま任せんいりるものを欲しめると同へ義秀が微  
 笑く異るるありありと田藏人吉見冠者佐味坐内ホと禁錮の  
 るその罪はあつるよこの鑑をりて分明るりければ件の人々恩免の  
 義を行とて又各々功のヨクは随ひ賞禄を賜ふとい盟書と書し  
 ぐその一通とこの證と交易しとあつるべといよは時政眼を睜て  
 其易くぬ換物るり評定衆と會談も遂む上の賢慮も料  
 かなは彼輩を免さんとい盟書と書せんやと推辞と義秀の時  
 必然でい交易破談るり今の世の賞罰の執權父子のまよりけるを  
 誰とくまらぬりものるいければ上の罰しめら則執權の罰する上の  
 賞しめらへの執權の賞する賞罰の名の君ふありてその實の君ふ  
 ぬらむを尸位素餐とい某この意を知ふより彼誓言文を求る





義秀の奸邪  
時政の奸邪  
を挫く

草子六巻

時政

時政

時政

時政



掉くく怕おほく主の時政は告りて時政頻に嗟嘆しく悔りて  
くぞありひける呼膽勇剛正の武士權を犯し奸と折れく世の人成りて  
愉快ありしむ実ふ古今の難事ぬるべし。

後輯第五十六

浮雲襖の猛雷  
團坐席の夢話

よの夜和田義盛その子義秀が還るを俟く嫡男常盛ホと相譚ひて  
挾夜深るすてもねざりしは丑三の比お及びく義秀をなぐる末父の  
同とりは赴死て郷高小頼家卿は見参の支の趣并小壺の浦人浦太郎が  
事を報く某ありよりわれいぢまは執權の宿所は直より遠州と對  
面しつる田吉見の寛柱を明々地より解ゆひは遠州へ下死つるけしが  
しと證據を取く推入をけれが疑心氷のおとくは解て執達の後と肯れり。



執權評定衆の連署到来して貴所并吉見佐味の入々恩免の御沙汰ありこれより明日己牌已前義秀と相共おぼく營中へあれとある。おん下知義秀の御是併義秀當所へ參り参るの夜中より諒とありといへば。

凍氷をうらぐ鮮盡七止水一巨海に帰せり。おぼくこれより参る。

浴の御礼服の儲の専女守戸より分付あり。この意をゆめいといふ可。

嘯は告ふけれ光仲の遠く席を避く頼とつれ仰の趣兼りぬ是より比。

より七所庇を卒龍居の旦暮を安く送る。苦中の樂不幸中の幸ひと。

七を思ひし賢息參府の程もく吾曹の萬死を極めて又天日とを奪り。

洪恩高義の今ゆり感涙の外は至再會の果胸臆を盡すべしといふ。

他事も多く言兼けり義盛の望の儲は暇をければと退る。住柄佐味の宿所々々使者と遣くおぼく告且登營の時刻を示し合さる。

彼人々より使往來してこの日より暮れけり。されば日ち光仲は諫らる。

守戸の局と男童ホハルん件の御趣を傳へてさうめ。誰を致さ。

命せられも奔走してその夜と長と待ひひり明れば六月廿六日の辰の時をり。

和田左衛門尉義盛義秀と光仲とねく營中へ参る。程は住柄平太胤長と吉見冠者義邦と伴ひ佐味内高利の河邊小三郎高吉と俱に營中へ参りけり。且く件の人々と齊一正廳に召聚合し執權遠江守時政の頼家卿の御名代とて上座あり。

左右の官令大江廣元同は所の別當三善入道善信あり。先義秀を召出で廣元仰と傳へり。和田左衛門尉の蔭子朝夷三郎景義は經任。

誅伐のとれ彼地におぼく軍功の時えり。あぞとて新規に御家臣小呂。

置れをんぬ但一相応の嗣所をけれい。其に莊園の宛行れを。格を黄人金と  
 のり。年別は如干兩と賜へ。宿衛の爲は遠侍は同候と忠勤を抽へ。  
 父左衛門尉もこの誠意をゆる敬訓を加ふ。其の也とい。傳命既小言訖  
 其の次は高利を召出。善信仰を傳へて云。佐味坐内。是義は經任誅伐の  
 軍監と。彼地は遣さ。所萬緒の進退。宿衛より。疑ひあり。と  
 出仕を止め。うるとい。恩免の君邊を退けて。外様を召置。のん井は  
 光仲が使者下向邊。小三郎も。今も召置。御用。今日則身の暇。取らる  
 る。進退の主の隨意。と。宣知。ける。次は義邦を召出。廣元仰を  
 傳へ。云。吉見冠者。是義は陸奥に在る。信丈莊司が援。と。召置。は  
 刺。の。刃。丈。婦。の。賊。徒。の。み。は。擄。ま。せ。れ。く。御。方。の。英。氣。と。折。く。とい。ども。最  
 後。の。義。秀。の。次。資。は。と。時。夏。と。討。捕。る。御。高。は。聞。召。と。る。り。あ。れ。れ。ども  
 光仲同意のり。依。り。疑。ひ。な。あ。り。故。は。在。柄。平。太。預  
 置。れ。り。是。よ。りの。後。あ。り。衆。議。よ。り。せ。ら。れ。る。寛。仁。大。度。の。あ。り。上。口。の。り。  
 此。度。光。仲。と。恩。免。の。御。沙。汰。と。り。ま。は。さ。れ。り。と。邪。正。と。同。る。ふ。及。び。且  
 冠。者。の。蒲。殿。の。孤。白。鳩。丸。と。り。その。時。は。あ。り。と。り。格。別。の。議。と。り。り。  
 武藏國足立郡石戸の莊を宛行。る。件。の。莊。園。の。故。幕。府。の。宛。時。足。立  
 藤。九。郎。盛。長。は。御。加。恩。の。地。と。り。と。その。子。景。盛。家。督。の。後。上。の。宛。氣  
 色。と。御。恩。と。り。御。居。せ。め。れ。れ。と。召。放。さ。れ。り。所。へ。彼。盛。長。の。蒲。殿。の。外  
 國。の。り。冠。者。の。外。祖。と。り。と。の。所。縁。あ。り。と。り。此。度。食。邑。は。賜。り。の  
 事。の。り。石。戸。の。宛。御。中。と。治。め。り。洪。恩。と。忘。る。と。り。備。録。倉。君。は。お。ん。大  
 事。の。り。と。馳。ま。る。べ。死。條。勿。論。と。り。とい。傳。命。既。は。言。訖。と。り。次。は  
 光。仲。を。召。出。と。善。信。仰。を。傳。へ。と。り。又。田。藏。人。光。仲。皇。表。を。駿。河。前。司

光仲同意のり。依。り。疑。ひ。な。あ。り。故。は。在。柄。平。太。預  
 置。れ。り。是。よ。りの。後。あ。り。衆。議。よ。り。せ。ら。れ。る。寛。仁。大。度。の。あ。り。上。口。の。り。  
 此。度。光。仲。と。恩。免。の。御。沙。汰。と。り。ま。は。さ。れ。り。と。邪。正。と。同。る。ふ。及。び。且  
 冠。者。の。蒲。殿。の。孤。白。鳩。丸。と。り。その。時。は。あ。り。と。り。格。別。の。議。と。り。り。  
 武藏國足立郡石戸の莊を宛行。る。件。の。莊。園。の。故。幕。府。の。宛。時。足。立  
 藤。九。郎。盛。長。は。御。加。恩。の。地。と。り。と。その。子。景。盛。家。督。の。後。上。の。宛。氣  
 色。と。御。恩。と。り。御。居。せ。め。れ。れ。と。召。放。さ。れ。り。所。へ。彼。盛。長。の。蒲。殿。の。外  
 國。の。り。冠。者。の。外。祖。と。り。と。の。所。縁。あ。り。と。り。此。度。食。邑。は。賜。り。の  
 事。の。り。石。戸。の。宛。御。中。と。治。め。り。洪。恩。と。忘。る。と。り。備。録。倉。君。は。お。ん。大  
 事。の。り。と。馳。ま。る。べ。死。條。勿。論。と。り。とい。傳。命。既。は。言。訖。と。り。次。は  
 光。仲。を。召。出。と。善。信。仰。を。傳。へ。と。り。又。田。藏。人。光。仲。皇。表。を。駿。河。前。司

廣綱の願ひより経任誅伐の大任を假しその所勝負區々ありし時  
 日を送り勵く義秀の次男よりと賊徒誅伏せむといへども義秀を伴ひ  
 せしと自分の功を倡へ賸不良の咎えめりしと和田左衛尉は預置れり  
 たるは執權遠州父子竊ふその才を憐れその罪をゆるぎし頻りに  
 まうし寛らるるありしと又ゆるく緯の邪正を問はせ所云罪の疑はれ  
 功の著せを賞せらるる但し光仲の駿河前司の女塔るよりその咎えめりし  
 といども彼人いふ家督の願ひを願はせしと陣中より逐電し今に至る  
 往方あるは光仲家督なるは由るのれが今ゆるめ家臣よりなれり  
 莊園も宛初れりしより沙金三百兩とて件の軍功を賞せしめその身  
 暇を賜ふれし但し武藏國太田の莊の廣綱の私田るるを息女且見  
 媛の所得とし光仲後見せんともその穩便の謀りし是非の内沙  
 汰ふ及れざるは廣綱の往方と素より彼人家督を願ひしと其の折の  
 召へるる上ありしより御沈酔して今日も出御る一廻遠州を御名  
 代とし誑意の翹件の如く各々兼知せられ後努々違乱あるべし  
 といふと嚴ま宣ふ衆皆齊一言兼して恩を謝しと退出するゆへ  
 義秀の管門の海より入る人々立別れ時政の宿所へと赴きける  
 管中より退たてりて時政を俟て久しうして時政は對面し執權  
 前諾を違へむとけのえん討ひを辱けし就て誓文一通を返す進  
 某が鎧の櫃をとりてのいと催促しつゝの一通を遞与しければ時政は苦嘆  
 多く何れもはらざる家詰しと櫃を義秀に返すも義秀は蓋を  
 撥取りんと執權これの唐山の鄙語よりか如く珠を返しと櫃を買入  
 然りとて送は損益る但光仲の一議のをいふと感心しつゝたれども天道の

盈るを憎む市家臣も多し下されむ社園も宛行れど畢竟放免人  
 多し死の如くも還るれば彼人の幸ひやあつた然其の馬儀も  
 り暇するを遠く外面へ立出づ權を後者も背負ひて類小馬儀  
 せしめて馳て宿所よりけり是より先は義邦高利光仲ホも義盛  
 胤長の後小限なく執權官令評定衆の宿所々々を巡る小江三三  
 廣光馬類標吉郎嗣忠城戸四郎武詮水草太郎五昌之ホの或  
 主の供小立或は途小出迎へ食管中の妙汰と寄り聊愁眉とひたり  
 かくて件の人々の義秀が還ると俟て共々飲ひと述べると和田の郎も腹合  
 しが義盛の常盛と吉席とひつる酒食と羞む管待も程は義秀  
 あり来よけれが光仲義邦高利ホ主後齊一出迎へ馳て上座請唐て  
 合飲びを述恩と感とく是全く腹負兄の義勇の論議よとるのれりん  
 嚮小執權と論のひりての有けるよへる大人の物々ありて大限を  
 りれりる海詳はゆまは甚麼も方便のひひと回へ義秀微笑て不  
 るのりもあぬと今誇白し生るも西女も一曩も某陸奥あく諸君子よつれ  
 より如此々々のありとて誣訪嶺の拂々の山盆九郎山路ホが初  
 とて岩神の事の趣友鶴が天折判五が妻も世と逝り鉄指矢藤五が  
 田鶴媛が厄難鞆繪の尼まのれりまを緯送もる説示も人々駭嘆せ  
 るものも且友鶴の死と悼や鞆繪の尼の教訓を只願感伏せりける  
 不血の数も遠程は光仲義邦共侶は廣細の通世紀念の扇歌のり小袋  
 坂の厄難より士卒も忽地離散して身囚徒とるりある古又の類物々  
 又高利言高吉の賊徒の首級と原と先とてある甲斐もる困は罷れ  
 古又の形勢箇様々々と光仲ホも過まらんと耳に常盛の小壺の濱も



義秀が用能と水戯の爲体を義邦先仲ホは況示せば胤長も亦重の  
論訪より一昨日やうな狂任ホが首級と鼻られ事の顛末と語り出て  
を慰めけるが程は夏の日も飽ぬ團坐ホを傾け胤長の宿所は退りく  
後姫不けの首尾を報知せんと人々告別ら後者をいそがしきせぬ  
が常盛の又夜騒の儲は且く奥へ七退ける當下義邦高利ホの先仲を  
つらくを喃藏人ぬくまゝの心は再會の面色のうまらたの大功ありく位  
階を削られ一所懸命の莊園に宛行れぬ故はそといへ先仲頭を推りて  
いそぐゆゆとある人徳薄うして任重く進をそを退を誰うよく元  
龍の悔るれことをいづらんや朝夷ぬの恩義ホより辛しく免れんこと  
まひるるれをその餘と願ふ死某が心の憂は然るもあはれけり朝夷  
ぬも何れ某の日の曉くまの怪し物と獲りその彼先実僕  
菅原二郎が且見姫は使る校枝共侶一包の袂物と携ふ某生告る  
嚮は姫へのんぬ俺們兩人相討ひく校枝が叔母守守戸の局は僕  
とくかん消息と届進ませり和田殿の時政ぬと郎と替はひ一城  
夢ふどもまゝと執權郎へてあはれつあはれとと推返され悔く  
とどまもる一包も封皮も舊のまゝと異なるくあはれぬ贈物の  
魚酢あるよりとあらぬと依和田殿の局門より七糸く守戸は遞と  
ひひた去るは伴の魚酢の中列り死毒を入れられ殿を猜し  
とも縁由を知り召ね姫へのんぬ疑ひあはれ魚酢のあはれ  
大殿を細のん紀念するを扇さ返させぬ三行半のん歌は姫へ敬  
書くせむいん自害とええい僕これを禁ん為柱へ縛めすあはれ腹  
切らる折は校枝の過失と悔ひの歎はつら共刃は伏る身は終り

今巷路の  
郎は義秀  
知已主徒と  
再會と



このと死校枝を嫂と知るも甲斐なれ今般の内兄弟只俺們が首級と  
 死にたは行心死すと殿へのいと死めんとを。又もくも姫うへまうし送りしけれ  
 どの姫うへの只薄命をうちも歎せぬひつ。おん頭髪を剪つひ死。かく件の袂  
 物よかん黒髪と一首の歌を包添させぬ折る。稻毛が家隼橋回苦六殿  
 兵をぬく推寄せまらぬ。狼藉及びび。間中隼人大く怒りく且く防  
 戦のりうう大敵なれ。既に危く遂に件の袂包を告六は奪界られ。姫  
 うへまは敵の為と擧とるせぬ。厄難と守護なる俺們既に身死  
 まれども。おひ詰る魂魄へる。おん母をまらぬ。間中隼人よ力を助  
 して。殿の敵と戦。恨し。袂包をとり復して。在院に火を放ち火攻めをなれ。か  
 敵へいづく。周章まら。辛くと逃亡し。ゆ程に姫うへの間中隼人を死供と  
 悪もろく。落させぬ。ひつ既に。伊豆國なる。監玉よ。おん母をまらぬ。おん母を  
 髪をせぬ。及せぬ。俺們匹夫の思慮短く。大切なる姫うへの。おん贈り物を  
 仇と遞与し。殿と詰めぬ。新姫うへの。濡衣と着せまらぬ。飽ぬ妹  
 伎のおん中を列衣れ。いのこそまらぬ。解く。死うへまらぬ。数なる。敵牙を  
 殺せども。誰う亦姫うへの。おん行心死すと。殿に侍らまらぬ。死口このと  
 どの故に身へ。二執の火坑に墮す。六道の迷ひ。雨存る時あり。朝夷ぬ。六録  
 倉へ。其者せぬ。おん龍り居も。恩免わすぬ。解厄の期も。遠く願ふ  
 伊豆の藍玉より。姫うへの。迎せまらぬ。更。借光同穴の契りと結せぬ。か  
 言露を。も。偽りまらぬ。證拠の。為。姫うへの。袂包と。まらぬ。く。ち。披  
 せ。疑念を解せぬ。と。某。二。郎。が。口。説。が。校。枝。も。共。に  
 語を。續。く。潜。然。と。ち。は。死。と。某。驚。死。且。憐。と。と。思。評。の。問。と。せ。し。か  
 二人の。忽。地。身。と。起。し。る。面。影。さ。は。初。に。似。せ。髪。を。乱。し。て。凄。しく。鮮。血。を

月... 一... 編...



